

百人一首古説

十
四



百人一首古説卷十四

西行法師

なげもそ月や物成おほいも類

りあちあるる家我洞うね

千載集 哀 月夜無きうんと

うり終

意すに他のもうひ詠あうち

よきこととせむる事

○おがはういふことあるは
あつたことなぬ一徳は海
まゝいふことあるはあつた
りいふことあるはあつた
○昔の歌にさういふことある
海を渡る一筋のいふこと

とけはういふこと今一筋の
とよむことあるはあつた
ういふことあるはあつた
人いふことあるはあつた
ふいふことあるはあつた
ひと新古今集 恋は同じ
あつたことあるはあつた

恨ふやまのやまに
くもつまのやまに
いふやまのやまに
いふやまのやまに

譜

台記云

宇治左府
頼長公記

康治院

近衛元年三月

十五日云西行法師来云依行一品經
兩院以下貴所皆下給也不嫌料
紙美惡只可用自筆余不輕義
諾又余問年公曰廿五
者本左兵衛尉義清也
以重代勇士佐法皇自俗時入
以於佛道家富年若心無愁遂

左衛門大吏
康清子

以_テ道也_ヲ人美_ニ歎_ス之也百練抄_ニ保

延_六年十月十五日西行法師出家_ニ

藤原秀郷朝臣の後也といへり

中興御使藤原秀郷朝臣依射將門之
賞天曆三年三月叙從四位下

又憲清則清とありては書傳と

○耳底記云西行はあふとてて

つりつゝありづもの集もあ

数多きいまりあらふひふんが

やうやうなりてききとくあきと

えへり今あらたなふたてうや

たうそいふなりやの事いふは

あふふいけりてききとくあ

かりては自然うきとたをりば

は法師のあふ自然とていふあふ

いづれかたのふたふたに
きよふたふたのふたふたに
きよふたふたのふたふたに
はまのふたふたのふたふたに
ふたふたのふたふたに

寂蓮法師

いづれかたのふたふたに

きよふたふたのふたふたに

新古今集 秋下 又十首のふた

なり 一 時

深山の秋のふたふたに

いづれかたのふたふたに

杉ぬきといひ又檜一種なり
右に二書ありしことと檜の
なりとさそとびとといふも
たに檜の類なりとある所と
種一成一と陰陽南部とも
いふもいふことなる所といひ
是檜の類なりと云ふ人なる所

の人のいふ所と云ふ必檜の類なり
と云ふこととさそとびとといふも
たに檜の類なりと云ふ人なる所
の板なりと云ふこととさそとびと
といふこととさそとびとといふも
たに檜の類なりと云ふ人なる所
の板なりと云ふこととさそとびと
といふこととさそとびとといふも
たに檜の類なりと云ふ人なる所

按直按

今ふいふ。ほふ
かてまゝの木
とやわと枝
まきと名つくる
名づけあひ皮
つくりたへく
物あれにわけ
くま成て土
入てくくく
又ほふまされ
まふと旧はて
名のゆゑと
中ふまの
となふと
細きと
まきと

なりきそて去る入る柄ぬあそ
きつうもあまたあるはあ
たと稱して上代より富貴とせり
或人に其の賞罰の法をえて
のふといやといへど想ふのふ成
稱したとき理あり義あり此
中よちしものあてもめが橋の

りやうとてあつてゐるひをながし
 く用ゐるを先代かめとあつていふけ
 ゑがふ梅といひども同じ梅ふ
 りて成へるさでつれあふまゝあは
 へ所をきかすといふやけ継を
 こそそのまゝさうなるのは清くはけ
 りてゐる梅といふてよりうとあ

わたり

今より世にさとりありて一様の
難ありて満ちるものなり

○あかきまゝにぬい後拾遺集に
大納言遠縁母

消えりあかきまゝにぬい神のふり
と胡いしめりて空よりなり

譜

父俊海阿闍梨

俊成
御弟

俊成の子なり

といへり明月記云建仁二年七月
廿日午時許かり参上左中弁少輔
入道轍逝去之由聞之即退去
已依為輕服也云々今聞之哀傷
之思難禁自幼少之昔久相馴
已數十回況於和哥之道者停輦
誰人乎已以奇異之逸物也云云

寂蓮ハ本名定長左中辨中務少輔
從五位下 顯昭寂蓮

方のりやと通せりといふとも昭昭ハ名體と
寂蓮ハ新辨といふ傳に相うつるなり

皇嘉嘉門院別當

難波江乃昔れより新の一松ゆへ

牙をらうてや意より入る

千載集 戀 標政太右衛門尉の

家此方人より旅宿をき戀して

いふふとより

法性寺殿に因作
標政太右衛門尉の

難波よりりのり此旅多し

おのひうけをきこふるは
切ふきこふるはきこふるは
きこふるはきこふるは
おのひうけをきこふるは
きこふるはきこふるは
きこふるはきこふるは
きこふるはきこふるは

○^{ユエ}おのひうけをきこふるは
きこふるはきこふるは
きこふるはきこふるは
きこふるはきこふるは
きこふるはきこふるは
きこふるはきこふるは
きこふるはきこふるは

○^{ニラフ}おのひうけをきこふるは
きこふるはきこふるは
きこふるはきこふるは
きこふるはきこふるは
きこふるはきこふるは
きこふるはきこふるは
きこふるはきこふるは

とあり

○みとつう 標榜と詞とせらるゝと
よりとて是に才とほかりん
志ぬくもあつとよとていふ在満
云 元良親王の才とつては
今とてよとていふもあつと
けりあめの所をばつてやと云

志ぬくもあつとよとていふ在満
云 元良親王の才とつては
今とてよとていふもあつと
けりあめの所をばつてやと云
の詞ゆへに才とてよとていふ
事やとていふもあつとよとて
用ひ志ぬくもあつとよとて
いふとていふもあつとよとて

神代卷神詠

飲^オ企^キ都^ト鄧^ト利^ケ軻^カ茂^モ豆^ツ句^シ志^シ磨^モ
尔^ニ和^ワ我^ガ謂^ハ祢^ニ志^シ伊^イ茂^モ播^ハ和^ワ素^ス
邏^ラ珥^ジ譽^ヨ能^ノ據^コ鄧^ト母^モ

萬葉序二

多^タ知^チ之^シ奈^ナ布^フ伎^キ美^ミ我^カ須^ス我^ガ多^タ字^ラ
和^ワ須^ス礼^レ受^ス波^ハ與^ヨ能^ノ可^カ藝^キ里^リ尔^ニ夜^ヤ
故^コ非^ヒ和^ワ多^タ里^リ奈^ナ無^ム

あまのうの世のこころいひの
うきうきといふふのうき世のうきと
ふも通うて知す又難波に
いふ中へはの世より一に
祐夢 蟹を食ふものむすなる
ふもふも人たりと願ふれ
女房のふもふもふもふも

あまこと一その根とあらふふい
うて藤の宿とてあひうめ
ちきりの名跡といふ成へ

譜

皇嘉門院聖崇徳院后大治
五年二月立后久安六年二月

院号詔法性寺殿忠通女也別當
太皇太后宮亮俊隆興平親王
女といふ別當といふいふ
かゝへて女名のこもていふ
いふ福むくも上院女別當
ある事いふいふ

式子内親王

玉の結は後ろむえ子やうへ
あつるうのあふらりむむ
新古今集 戀 百の歌に
あふれ

あつれうとれあつれいむいふ
とんとくとりあふれいむいふ

とささきとささきあふれいむいふ
あふれいむいふあふれいむいふ
さつれいむいふあふれいむいふ
あふれいむいふあふれいむいふ
○玉の結はあふれいむいふ
さつれいむいふあふれいむいふ
あふれいむいふあふれいむいふ

くりよせつおのよとけてとま
しつゝおの結れまゐりつゝ
又二つゝおの結れまゐりつゝ
うねおの結れ結れ又つゝ
ふんおの結れ結れ又つゝ
人の結れまゐりつゝ
おの結れまゐりつゝ

おの結れまゐりつゝ
おの結れまゐりつゝ
おの結れまゐりつゝ
おの結れまゐりつゝ
おの結れまゐりつゝ
おの結れまゐりつゝ
おの結れまゐりつゝ
おの結れまゐりつゝ

○もぞもろり或はは流雲の河と
いふいふ心持いふやまをり
ぞもろりいふ心持いふやまをり
さそとていふいふ心持いふやまをり
さそとていふいふ心持いふやまをり
さそとていふいふ心持いふやまをり
さそとていふいふ心持いふやまをり
さそとていふいふ心持いふやまをり

乃いひやそそはささ成
成まにやそそはささ成
成まにやそそはささ成
成まにやそそはささ成
成まにやそそはささ成
成まにやそそはささ成
成まにやそそはささ成
成まにやそそはささ成

胡忠集よとのいふたへく大捕
の者の腐ふよそそはささ成
さそとていふいふ心持いふやまをり
さそとていふいふ心持いふやまをり
さそとていふいふ心持いふやまをり
さそとていふいふ心持いふやまをり
さそとていふいふ心持いふやまをり
さそとていふいふ心持いふやまをり

あつたそあつたそあつたそ
よそくくあつたそあつたそ
又まゝ集まるとあつたそ
但しふていづれあつたそ
そとふていづれあつたそ

あつたそあつたそあつたそ
あつたそあつたそあつたそ

伊勢物語

あつたそあつたそあつたそ
あつたそあつたそあつたそ

あつたそあつたそあつたそ
あつたそあつたそあつたそ

譜

つきの神をかくぬきし。
とある。又よよりて雄島は
人うぬきぬきてぞり神
と又いふぬとぞり神ぬ
て終に神よとぞりも
なるといふていふぬ
とぬけずはととぬきし

つきの神をかくぬきし。
暫くといふへきなり

○雄島に陸奥より名のと
或は松名島なりといふ

松名島なり。或は雄島と
いふなり。

とある。又よよりて雄島は
人うぬきぬきてぞり神
と又いふぬとぞり神ぬ
て終に神よとぞりも
なるといふていふぬ
とぬけずはととぬきし

雄と云くは富子と云ふ人
と云ふ事なりと云ふ事なり

○紅河のり、周易の泣血と韓非子
と楚人市和抱其璞而哭於楚山之
下三日三夜泣盡而繼之以血
の類を多くしこれよりて若之
如の事なり

白河をいへ潤年ぬとは

後
か紅ベニよりうつりひより

譜

殷富門院後白河院皇女安徳

天皇皇后也大系圖 文治三年六月

号殷富門院建保四年四月朔

百練被大輔祖父後白河院判官代

行憲

高藤
公後

父從五位上信成也

大和國
法城守

後京極棟政前太政大臣

きりくはちねむねおのさき定

衣かきき性子祐ん

新古今集秋下百景のあきり

りう時

きりくはちねむねおのさき定

焼さしきおねのいとうぐいきに

人々もきこひてかたけり
まろきとせむとんとせり
ける人れもあはれきなり
成へいせむとせむとせむ
んろくくきく秋の歌もあ
集秋よ
焼く秋の歌もあはれきなり

楊りる人のいふかたけり
といふかたけり
かたけり
万葉集

秋風之寒吹アキカゼノサムクフク倍ヘ吾屋前之
浅芽之本アサナノモト蟋蟀コウロキ鳴毛
蟋蟀之吾床隔尔コウロキノミカドニ鳴官本名

起居ツキ管君ツバキミ尔ニ戀コウル尔ニ宿イナカテ不勝ナラニ尔ニ乃欲ナラニ

足曳乃山鳥尾四垂尾長永夜

宇獨鴨將寢

吾ワカ戀コイ妹イモ相佐イモサカサ受玉スベ浦丹衣ウラニ厅カク
敷シキ一鴨ヒトリカモ將寢チ

冬今集

十印トウイン乃ナ恋コイ尔ニ宿イナカテ不勝ナラニ尔ニ乃欲ナラニ

我ワとニつニらんニ定イサのノ愛アイ媛メ

こもニのノおニれニ河カとニりニ今イマとニわ

るニとニあ

○蟋蟀セウソウ乃ナ葉エフよりヨリふニかニるニ乃ナと

刈カとニきニ又マタせニりニけニ入ニるニ乃ナとニわ

あニりニ乃ナをニ私シ名ナ抄セウ乃ナ蟋蟀セウソウ一ヒト名ナ

本里ホンリ本ホンとニつニらニ乃ナとニりニ名ナとニわ

くろく——いふふふれい彼ね
かといふふふれい時境りく
蟋蟀とふふふふれいや
ちとふふふふれいふふふふれい
く——いふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふ
かへふふふふふふふふふふふ

るふ——毛詩云七月在野八月在
九月在戸十月蟋蟀入我床下
床下入くふふ十月とふふふ
ふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふ

くらさくらくまめこふといひりて
 うらさのがるる葉集より
 板子てくら魚（但今中のうをあらね
 けさくらといひにけり）
 湯りかり

○ 新うゝもといふの衣と云
うぐ^{イロ}ハ衣のうゝのりまゐる
り故より衣とてあらむといふ

田一 屏万 集ふ 衣片 衣々
 書うが 衣々 肌 衣々
 人ともて う 衣々 衣々
 衣々 衣々 衣々 衣々

○いふみふううも家内
高千のふく今く万葉集に
のりつと用おらまゝなり

はげしきまていふもの
かれりけり自地の如く
つゝあてふまゝ人の
ひかり

譜

祖父法性寺殿忠通父後法性寺殿公実

母從三位藤原秀乃行女也建仁辛
十二月攝政元久元年正月從一位同
土月辭左大臣同十二月太政大臣
同二年四月辭太政大臣建永元年
二月薨諸記
同

二條院讃岐

日か袖の沙羅ふくぬ沖乃石を
人こそ志くぬかひては
千載集 寄石戀といふ人
いふは袖の沙羅ふくぬ
あふはつゝのさかふ人
さかふ人といふは沖乃石

わが石の沙羅ふくぬ
波のそふぬさくわがふた
あせり石のさかふ人
よりいふは沖の石を
さかふ人といふは
もたゆふくはひては
あやう

○勢冲云おきの石と云はれとて
即て沖の石といはんゆゑいふ
そやと云ふ一ツ又ほ焦石と云ふ
是て然るや 万葉集卷六
難波の宮とて云ふる長祢
海石乃塩干乃共洲渚尔波千鳥
妻呼ツキ云々

けりまの石の塩干とてあるは海
焦石よりて百洲渚といふとも
塩の海と云ふなりていふと
おけり 莊子云水莫大於海
尾閭池之云々又同人の云
○みよゝこを入ぬる磯の草まゝめ
神さへ波のりよ折ぬる 今梅

沖の石をすつていそいそと解
 けたる石と活焦石あり

其のついで

治承三年十月九條
右大臣上卿實公之家

今小庵と伊きち仲鍋のぐりふとふあぢい
隠きぬ沖のともきこる小庵うつひ表の囃と名
さぬさのふあといふまはえ
よやあぢいともあぢ

譜

院

守御
仁壽

白王考後白河院皇純皇

太后懿大納言藤經實卿女也

保元三年十二月即位
永萬元年

七月山明御

三十三
百練抄

讚岐源三位賴政卿女

按諸

鎌倉右大臣

世乃中へるもなる法く
 河乃れ山の繩子なりと
 新勅撰集 羈旅 題名
 古今集 陸奥 いくは
 と地乃のうゝあゝみの繩子
 万葉集 十市白妻

こゝろのなみだに涙を流しは
る旅路の境をしの浦といふ
の京よ春をきて今くは
能くぬえとも来てこそ
おどろくつとよの世に
うらなふ命をぬきまは
けいけい度よ来くを

とこころもぬきとぬき
て切なる時の情を
けんとつとよと
卯も風流よのそと
おどろくつとよの
かき

〇うもねいづるそとに

保い前ふり

○つるまで網あそく祝詞は遠國

者八十綱お掛引寄如い

船は縄つけて子して

つるまといり縄子縄あ綱を

とあるも同

○かろしとあめあてふふ

とふ同くあもせり

○或説は万葉集あまの世間

牟何物あ将辟言朝開標去

仲船之跡無如

といふあのみろといふあもな

へおあを那さそけ旅のみと

傳ふはさそけ百そよ入らしたま

いふまじきとろこもぐまきりりか
りりは、備也こもよりも杉將
づきいりるもの志の承神の山崎
かもの、あまゆきへ

譜

父、右大將頼朝卿母、北條時政女
鎌倉殿公實朝建仁三年九月

叙後五位下補征夷大將軍建
暦三年二月正三位建保四年六月
權中納言六年十月内大臣同十二月

右大臣

左大將
如元

七年正月薨

公右
補任

持中云、鎌倉右大臣にたある
か人と見え、侍も主人の御代は
あつていりても、あつてあつていり

実よりいふにまじりてあひ
たり被詠作と見たりけりそ
退屈の心も出来ておうけり
文よりあふくもけりね風骨也
○梅より云ふる多葉集と云ふり
後世の客かやう巧と云ふる
は且自然の如く風骨あり

後世をまゐる人のくいたて及び
しるふにけりけりけりけり
あつたふにけりけりけりけり

矢多議雅經

みづのふの秋風山奥文多
方々々々々々々々々々々々
新古今集秋下接ぎん枝
いづきききききききき
文々々々々々々々々々々々
うづる文のさじさじさじ

衣々々々々々々々々々々々
吉野乃山下風能寒久尔
ともうそゆうそゆうそ
威々々々々々々々々々々々
衣々々々々々々々々々々々
うづる文のさじさじさじ
まわり唐詩やうそ寒聲

といりお友日記ふ松風の声
のさむきふもあふともふ
へ

○ふおきては風物とてへり
○ふ一押よもなといふ齋明天皇
ちづめても此の宮代らへ
あふよおつも天武天皇持統

天皇はくは誰かみあき
めひりまは昇り此の宮城
とてしちのふりあふし
ふおろしちあひて目ふ成る
とふりあふちあひてはあふ
あふちあふちあふちあふ
りあふちあふちあふちあふ

高やぬ目たししもの
ふの白きしものしるしを
成増ちやうとちかしのちか
もなやうけふちの友別のも
とまゝしるちかしのちか
いふへるまゝけふちのちか
ちか集の二とちかしのちか

たふことしるしを
くはふしちのちかしのちか
まゝ成下ちかしのちか
はり

譜

父刑部卿頼経朝臣母顯雅也
雅経卿兼久二年従三位同十月



1001958774

参議三年三月薨^{公卿}
^{補任}兄宗長卿
難波家^いの^いお^いお^いの^いの^い
若^い後世^いの^い家^いの^いの^い

